

共同研究グループ活動報告（2016年度）

日中関係史研究会

本年度の講演会は一回の開催にとどましたが、関連研究会が多数、開催され、日中関係の過去と現在を再照明するきっかけを作ることができた。2017年からは中山みどりが代表をつとめることになるので、さらなる支援をお願いしたい。以下、本年度に開催された研究会と関連研究会の日程を箇条書きで記す。

(1) 研究会

テーマ：「『交流』の経験」講師：木山英雄先生
(神奈川大学元教員)

日時：2016年7月5日（火）
場所：神奈川大学横浜キャンパス・20号館 453
教室

(2) 関連研究会

テーマ：中国古典小説研究30年の回顧と展望
日時：2016年9月4日（日）、9月5日（月）
場所：神奈川大学横浜キャンパス（1号館）
主催：神奈川大学外国語研究科、神奈川大学人文学研究所 中国古典小説研究会

参加者：【中国側】金健人（浙江大学）黃仕忠（中山大学）黃霖（復旦大学）孫遜（上海師範大学）廖可斌（北京大学）樓含松（浙江大学）【日本側】大木康（東京大学）大塚秀高（埼玉大学名誉教授）岡崎由美（早稻田大学）金文京（鶴見大学）

(3) 関連研究会

テーマ：「中国残留孤児だった父を持って～記憶の継承について考える」（城戸久枝氏）

日時：2016年10月22日
場所：横浜キャンパス3号館B102教室

(4) 関連研究会

テーマ：「上海研究の意味はどこにあるのか」（盧漢超、Professor of History, Georgia Institute of Technology）

日時：2016年6月28日（火曜日）

場所：神奈川大学横浜キャンパス 20-210室

（文責 山口建治）

色彩と文化Ⅳ

本年度より「言語景観」に研究の重きをおく方向で研究会活動を再スタートした。メンバーはそれぞれの研究と関係のあるエリアで言語景観の調査をすすめている。

- (1) 研究会の開催：なし
- (2) 海外調査

佐藤裕美は、主にイタリア中部のアレツツオで調査を行なった。イタリア語のホテル arbergo と英語の go を引っ掛けたような看板や駐車禁止の看板の様子などを調べた。

小林潔は、2016年8月23日～31日までロシア連邦アストラハン市に滞在、言語景観のうち日本語使用について市内で調査した。大型商業施設で販売されているもののうち、洗濯洗剤で日本語のラベルを付けて売られているものを写真撮影も含め記録した。当該商品と並んでドイツ語を付した洗剤もあったことから、日本とドイツのものは高品質というイメージがあるものと推察される、と報告している。

尹亭仁は、2016年9月12日～15日までタイのバンコクに滞在、タイにおける日本語の使用・景観について調査した。日本に対して友好的なバンコクでは多くの日本車が走り、紀伊国屋も進出しており、大型商業施設の中には大戸屋をはじめ和食屋が入店していることを確認した。

シーナカリンウェイロード大学で日本語を教える村木先生、田中先生からバンコクでの日本語の景観を日本語教育に生かしている話も聞き、今後の言語景観と外国語教育における有効性などについて意見交換をした。バンコクでの言語景観をレポートとしてまとめ、「国際文化交流専門演習

II」の授業で取り上げた。

2017年度より調査の結果を研究会で発表するなど、共同研究を本格化していく予定である。

(文責 尹亭仁)

言語変異研究

1. 研究内容：今年度は主に言語と社会の関係に関する総合的な研究を行った。特に歴史的言語景観に関する論文執筆と調査研究を行った。

2. 調査研究の主なテーマ：

- (1) 「言語景観研究の可能性について——ことばと社会のインターフェイス——」
- (2) 「千年前の中国都市言語景観」
- (3) 「上海言語景観の百年間の変容——“大世界”の事例研究」

3. 研究所蔵資料の収集：

『宋画全集』第1巻(8冊)、第2巻(2冊)、第3巻(2冊)、第6巻(6冊)浙江大学出版社2008~2010年
 『辛亥革命大写真』(全2冊)湖北美術出版社2001年
 『遺失在西方的中国史』(全2冊)北京時代華文書局
 『近代東亜百年図像集』TW博揚文化2012年

4. 2017年度も引き続き歴史言語景観について調査する予定である。

(文責 彭国躍)

活字文化の研究

1. 共同研究グループ名：活字文化の研究
 2. 講演会・研究会の開催：適宜、メンバー間での情報共有を行った

3. シンポジウムの開催：特になし

4. 活動内容

- (1) 活字を通じた日本語教育と異文化理解(国際)に関する調査・研究
- (2) 活字文化普及のための教育・啓発活動(教育)に関する調査・研究

(文責 松本安生)

〈身体〉とジェンダー研究

活動内容

- ・本研究グループと都市表象研究グループを母体とした神奈川大学共同研究推奨助成を得た研究の成果物『破壊のあとの都市空間——ポスト・カタストロフィーの記憶』(熊谷謙介編著、青弓社)が今春出版される。本研究グループ構成員からの寄稿も3点含まれている。
- ・本年度は、ジェンダーと身体に関わる研究を個々にすすめながら、新たな問題提起と論点を開拓するべく、年度末に勉強会を開催することを予定している。

(文責 小松原由理)

自然観の東西比較

1. 共同研究グループ名：自然観の東西比較

2. 講演会・研究会の開催

第1回研究会

開催日：2016年5月25日(水)

会場：17-216

発表者：前田禎彦(神奈川大学外国語学部教授)

演題：平安京社会と寺院・神社

第2回研究会

開催日：2016年6月29日(水)

会場：17-216

発表者：大川真由子(神奈川大学外国語学部准教授)

演題：中東・イスラームにおける自然観
 —沙漠・遊牧民・ラクダ—

第3回研究会

開催日：2016年7月28日(木)

会場：17-216

発表者：上原雅文(神奈川大学外国語学部教授)

演題：東西の「基層的自然観」とその変容の概要—その2(東洋編)

第1回講演会

開催日：2016年10月26日(水)

会場：17-216

発表者：石原あえか（東京大学総合文化研究科准教授）

演題：ゲーテの詩と音楽から読み取る神と自然と人間

第2回講演会

開催日：2016年11月30日（水）

会場：17-216

発表者：大工原豊（國學院大學兼任講師、本学非常勤講師）

演題：縄文ランドスケープ研究の現状——縄文人の自然観・宗教観——

第4回研究会

開催日：2017年2月22日（水）

会場：17-216

内容：『人文研究』No.109（2016年）に発表された、研究テーマに関する以下の論文の合評会

伊坂 青司「シェリングの絵画論とフリードリヒのロマン主義風景画」、上原 雅文「日本の自然観の変遷（その一）—原初神道における一」、山本 信太郎「パー爺さんとその時代—近世イングランドの長寿者の物語—」、坪井 雅史「日本沿岸捕鯨史研究のための覚書—福本和夫『日本捕鯨史話』を中心に—」

3. シンポジウムの開催計画

なし

4. 活動内容

本研究グループは、昨年度から神奈川大学共同研究奨励助成金の交付を受け、研究計画に沿った活動を行っている。本年度も引き続き、研究調査の実施、研究会・講演会の開催など、活発な活動ができた。外部講師による講演会を2回開催し、不足していた知見を得ることができ、活発な議論も交わされた。本年度は、研究会と講演を通じて、日本およびイスラームという東洋の自然観研究に進展が見られた一年であった。

（文責 上原雅文）

近代都市の表象

1. 近代都市の表象

2. 今年度は、人文学研究所叢書の執筆と校正を

おこなった。熊谷謙介編著『破壊のあとの都市空間—ポストカタストロフィーの記憶』（青弓社）が当該叢書であり、2017年3月に出版予定である。

3. 夢と幻滅とを伴いつつ近代化し、さまざまな問題と直面してきた欧米・東アジアの都市について、どのような表象がどのような諸力と関連しながら提示してきたのかを検証する。

（文責 鳥越輝昭）

ヒト身体の文化的起源

1. 共同研究グループ名：ヒト身体の文化的起源

2. 活動内容

① 人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討した。

I 関節運動を増幅するアキレス腱の屈曲点について調査・研究を進め、下記の論文が発行された。

· Influence of intramuscular fiber orientation on the Achilles tendon curvature using three-dimensional finite element modeling of contracting skeletal muscle. *Journal of Biomechanics* 49 (14): 3592-3595, 2016.

II ヒトの四足走行に関する研究を進め、下記の論文が発行された。また、下記の学会での発表を行った。

· How fast can a human run? — Bipedal vs. Quadrupedal Running. *Frontiers in Bioengineering and Biotechnology* 4: 56

· ヒト四足歩行のキネマティクス. 第24回日本バイオメカニクス学会（立命館大学 びわこ・くさつキャンパス @ 草津市, 平成28年9月12日～14日, 2016）

· The metabolic cost of quadrupedal walking in human. 21st annual Congress of the European College of Sport Science (Vienna, Austria, July 6-9, 2016)

（文責 衣笠竜太）

帝国とナショナリズムの言説空間

1. 公開シンポジウムの開催（2016年11月23日～24日）

場所：国立フィリピン大学アジア研究センター（マニラ）

第1日目：11月23日：

9:00～9:15 Opening Address: Joefe Santarita (University of the Philippines)

9:15～9:30 Theme of the Symposium: Yoshiko Nagano (Kanagawa U)

9:30～11:30 Session 1: *Empire and Southeast Asia*

Moderator: Dulce Natividad (University of the Philippines)

Paper Presenters:

Patrick Campos (University of the Philippines):

“The Empire in “World” Cinema and the “Nation” in Southeast Asian Regional Cinemas”

Hiroshi Murai (Kanagawa U):

“Chinese New Village and Citizenship of Chinese Population in British Malaya, 1948–1957”

Discussant: Michelle Palumbarit (University of the Philippines)

12:30～14:30 Session 2: *Colonial Modernity and Nationalism*

Moderator: Janus Nolasco (University of the Philippines)

Paper Presenters:

Reuben Ramas Cañete (University of the Philippines):

“20th Century Philippine Art: Reflections of an Imperial Origin and its Nationalist Possibilities” (withdraw)

Nobutaka Suzuki (University of Tsukuba):

“Debate over U.S. Rubber Plantation in the Colonial Philippines”

Discussant: Stewart Young (University of the Philippines)

14:45～16:45 Session 3: *Nationalism and Diplomacy*

Moderator: Janus Nolasco (University of the Philippines)

Paper Presenters:

Ramon G. Guillermo (University of the Philippines):

“Selamatkan May Jane!”: Stirrings of a New Internationalism?”

Ryo Takagi (Kanagawa U):

“Discursive Space of Political/Social Movement in Thailand: Some Background to the Conflict”

Discussant: Antoinette Raquiza (University of the Philippines)

第2日目：11月24日：

10:00～12:00 Session 4: *Reification of (Postcolonial) Nationalism*

Moderator: Victoria Quimbo (University of the Philippines)

Paper Presenters:

Michiyo Yoneno-Reyes (The University of Tokyo):

“National Culture Making and American Legacy: The Location of ‘National Cultural Minorities’”

Kazutaka Hisada (Kanagawa University):

“Public Diplomacy and Nationalism: Focusing on Comparison with ROK and Japan”

Discussant: Benjamin San Jose (Ateneo de Manila University)

13:00～15:00 Session 5: *Empire and Nationalism in History*

Moderator: Henelito Sevilla, Jr. (University of the Philippines)

Paper Presenters:

MCM Santamaria (University of the Philippines):

“[Re]imag[in]ing Sulu: Photography, Scholarship and Representations of the Philippine South in the Philippine Center Advanced Studies Ethnographic Survey”

Hidekazu Sensui (Kanagawa University):
“The Myth of a Humanitarian Marine: Racisms and Nationalism in Remembering the Battle of Saipan”

Discussant: Ricardo Jose (University of the Philippines)

15:00~15:15 Closing Remarks: MCM Santamaria (University of the Philippines)

2. 活動内容

神奈川大学共同奨励研究助成金「帝国とナショナリズムの言説空間：国際比較と相互連携の総合的研究」(2014~2016年度)と同時並行で進めている共同研究グループである。第3年度の研究活動をまとめにあたり、3月23~24日に本学箱根保養所にてセミナーを開催し、来年度に研究叢書を刊行する準備を行う予定である。

(文責 永野善子)



NCH 新聞研究会

本研究会は、神奈川大学が所蔵するNCH (North China Herald) 新聞 (ONLINE版) の日本、中国、韓国、東南アジア諸国に関する新聞記事の研究を目指している。本年度は、『良友』画報研究会と共同で複数の研究会を開催することができた。また、資料方面では、The Shanghai Evening Post and Mercury (1943年~1946年、NY版) を購入することができた (『良友』画報研究会と共同)。

その他に関連研究会として「上海研究の意味はどこにあるのか」(2016年6月28日、Hanchao Lu, Professor of History, Georgia Institute of Technology, 横浜キャンパス20-210室)を開催した。

また、国際シンポジウム「上海と『良友』画報の世界」(10月22日)もNCHとの関連のある研究会であったので、以下、概略を箇条書きで記しておく。

第一部

- (1) 「『良友』にみる食文化について」岩間一弘 (慶應義塾大学)
- (2) 「『良友』画報と文学」中村みどり (神奈川大学)
- (3) 「『良友』画報と日本表象」石川照子 (大妻女子大学)

討論: 孫慧敏 (台湾中央研究院), 林美莉 (台湾中央研究院), 陳祖恩 (上海社会科学院)

第二部

- (1) 「『良友』画報とポスター」田島奈都子 (青梅市立美術館)
- (2) 「『良友』画報と漫画」城山拓也 (立命館大学)
- (3) 「上海小報議『良友』」林美莉 (台湾, 中央研究院)
- (4) 「『良友』画報と『誰讀良友』?」孫慧敏 (台湾, 中央研究院)
- (5) 「『良友』画報と大上海都市計画」陳祖恩 (東華大学)

討論: 菊池敏夫 (神奈川大学), 村井寛志 (神奈川大学), 森平崇文 (神戸学院大学)
(文責 孫安石)

声の文化

今年度は以下のとおり研究会を2回実施した。
 日時：2016年5月31日（火）18:00～19:30
 場所：人文学研究所資料室
 報告者：深澤徹 外国語学部教授
 題目：「かたらう日本語とかたどる欧米語——演能の場における「アイ」の語りのはたらきをめぐって——」

日時：2016年12月7日（水）16:30～18:00
 場所：人文学研究所資料室
 報告者：山口健治 外国語学部教授
 題目：「民間信仰の当て字、武塔（ムタフ）神と牛頭（ゴズ）天王——私の声の文化研究——

また、前年度末に以下の映画上映会と談話会を開催した（前年度の報告に未記載）。

日時：2016年3月4日（水）17:00～20:30
 場所：3号館204
 上映作品：『うたうひと』

内容：酒井耕・濱口竜介監督の宮城県の民話探訪ドキュメンタリー映画『うたうひと』（2013年、120分）を鑑賞後、参加者が映画の感想と「声の文化」の意義と継承について語り合う談話会を行った。映画鑑賞後の談話会では、民話研究、映画研究、文学研究など、多角的な視点からコメントがあり、示唆に富む充実した意見交換が行われた。参加者は共同研究グループ「声の文化」のメンバーのほか、他大学の研究者、作家、文芸編集者など、多様な分野の専門家が集まり、本研究グループの活動に広がりがもたらされた。

（文責 村井まや子）

日韓対照言語研究

本年度発足した「日韓対照言語研究」は「日韓両言語におけるボイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究」を当面の課題として掲

げ、研究活動をすすめている。

（1）研究会の開催

日時：12月7日（水）16:30～18:00

発表者1：佐藤裕美（本学教授）

テーマ：「パーエクトと過去：アスペクト形態素—テイルの考察から」

発表者2：李忠均（本学非常勤講師）

テーマ：「韓国語テキストにおけるアスペクト表現」

（2）海外調査

尹亭仁：ソウルにある韓国国会図書館および教保文庫で日韓両言語におけるボイス・テンス・アスペクト・モダリティ関連の研究の現状および参考資料などについて調べた。2016年7月24日～27日

今後、年数回の研究会を計画しており、来年度は主に「テンス・アスペクト」に焦点を絞り4月からコンスタントに開く予定である。そのため全メンバーに発表を呼びかけている。韓国で日韓対照研究を行なっている研究者にも声をかけ、交流を深める方針である。

（文責 尹亭仁）

講 演 会 要 旨

1. 開催日 2016年5月23日
2. 会場 23号館305室
3. 講演者 守田優子先生（東京理科大学理工学部）
4. 演題 若年成人の睡眠関連問題が日中機能に及ぼす影響

睡眠障害の罹患は、健康関連 Quality of life の低下、認知機能の低下、抑うつの増大などの二次障害をもたらし、近年では思春期や青年期の生徒、学生における学業成績の低下や不登校等社会的なパフォーマンスへの影響が問題となっている。また、若年期における抑うつの発症は将来的に慢性化、重症化すると報告されていることから、若年期における睡眠問題を予防することは極めて重要である。今回は、若年期に多い睡眠障害および睡眠関連問題である睡眠不足症候群と睡眠相後退を取り上げた。慢性的な睡眠不足から日中機能や気分が低下する病状のことを睡眠不足症候群（Insufficient sleep syndrome: ISS）とよび、諸外国の若年者における ISS 有病率は北欧で 10%，韓国では 19% と報告されているが、日本では不明である。そこで、20-25歳の日本人若年者約 2300 名を対象に ISS 有病率とその関連要因を検討する調査を実施した。その結果、日本人若年層における ISS を有する者の割合は 11% であり、その関連要因は大学生であること、フルタイム勤務者であることであった。また、ISS の者は抑うつが高く、精神的健康度が低く、それは睡眠相が後退している者ほど顕著であった。

ISS と同様に近年、若年者に見られる睡眠問題として、睡眠相の後退（夜型化）がある。睡眠相の後退は、短時間睡眠や、不眠症状同様にうつ病を発症させることとして知られるが、それらの有病率には性差がある。そこで、若年睡眠相後退者において、抑うつ有病率および抑うつと睡眠関連障害との関連性の性差を明らかにした。その結果、睡眠相後退者は男性に多いものの、後退者における抑うつ有病率は、女性で高いことが示された。また、男女ともに抑うつには不眠症状と眠気が関連するが、女性でのみ、睡眠相の後退も抑うつに影響することを明らかにした。若年者の睡眠関連問題は公衆衛生上、重要な課題となっているが、性差を考慮した治療や予防方法の提案が望まれる。

本講演会では上記の研究内容に関して詳細に紹介する。

（文責 塩田耕平）

1. 開催日 2016年7月30日
2. 会場 20号館109室
3. 講演者 笹沼俊介
4. 演題 社会人ボディビルダーのウェイトトレーニングとボディメンテナンス

講演者は、社会人でのボディビルダーの重要性と難しさについて講演した。講演者は、本学入学後からボディビルを始め、大学2年次には関東学生ボディビル選手権3位、大学3年次には全日本学生ボディビル選手権6位、という成績を残した。本学卒業後は、地方銀行に入行した。社会人は、学生とは異なり、仕事の前か仕事の後の限られた時間の中でウェイトトレーニングと栄養管理によるボディメンテナンスを行う難しさがある。特に、社会人1・2年目は、学生生活から生活面全般の切り替えに手間取り、ボディメンテナンスが疎かになるリスクがある。ウェイトトレーニングは、単純なルーティンをコツコツと積み重ねていくことが必要である。試合に向けて減量を行いながら栄養管理を行うことは、強靭な精神力も必要である。このような状況において、講演者はウェイトトレーニングを一時中断し、別のスポーツ（例えば、ゴルフなど）を楽しむ機会を増やす試みを実践していた。別のスポーツを行うことによって、ボディビルダーの魅力や面白さを再認識し、モチベーションの向上を意図した取り組みであると理解した。

（文責 衣笠竜太）

1. 開催日 2016年10月26日
2. 会場 17-216
3. 講演者 石原あえか先生（東京大学総合文化研究科）
4. 演題 ゲーテの詩と音楽から読み取る神と自然と人間

石原あえか先生は、ゲーテ（1749-1832）が「神と人と自然」についてどのような思想を抱いていたのかを、詩・音楽・絵画を示しつつ講演された。教員や学生の参加も多くあり、活発な議論が行われた。講演内容は以下の通り。

ゲーテの、初期の3つの詩「プロメテウス」「ガニュメート」「人間性の限界」（1770年代から1780年代初め）には、神に対する3様の姿勢が見て取れる。「プロメテウス」では、神を崇めることを拒否し、神に対抗して人間の領域を主張している。これは、当時のフランクリンによる雷が電気であることの発見、避雷針などの自然に対する防御など、科学によって自然の神性が剥奪されたことを反映している。一方、「ガニュメート」は、美少年のガニュメートが鷹になった神につれさらわれてオリンポス山に向かう時の歌で、神の力もしくは慈悲の働きに対する人間の諦めが歌われている。「人間性の限界」では、人間は畏怖すべき神と競ってはならないとし、大いなる神の時間の中で、小さな人間の時間が世代を超えて途絶えることなく連鎖を成している在りようを歌う。ここには、神への対抗でもなく諦めでもない、神の時間と人間の時間との区別と融和の在りようが歌われている。これらの詩が同時期に作られたところに、ゲーテの、神と人間に關する偏りのない思想が窺える。

『西東詩集』（1815年）は、14世紀のイスラーム詩人であるハーフィズの詩及びイスラームの影響を受けて書かれた詩集である。「再会」では、神（アッラー）による天地創造と人間の恋とが重ねられて歌われており、ここからも神に対するゲーテの多様な思想の一端が窺える。

一方、ゲーテは自然学者でもあり、植物学・地質学・光学・骨学などの多様な分野で、数多くの論文がある。「植物のメタモルフォーゼ」（1798年）という教訓詩は、自身の植物学の成果を詩に表現したものである。ここでは、リンネの性的植物分類に対して、ゲーテが発見した植物の生長に関する動的で生成的な法則が詩的に表現されている。この詩には、ゲーテの自然観が端的に表現されているのである。

以上、ゲーテの詩には、「神と人と自然」に関する多様な思想が描かれているのである。

（文責 上原雅文）

文 献 解 題

文献 『宋画全集』第1卷(8冊), 第2卷(2冊), 第3卷(2冊), 第6卷(6冊)

編集 浙江大学中国古代書畫研究中心

出版社 浙江大学出版社

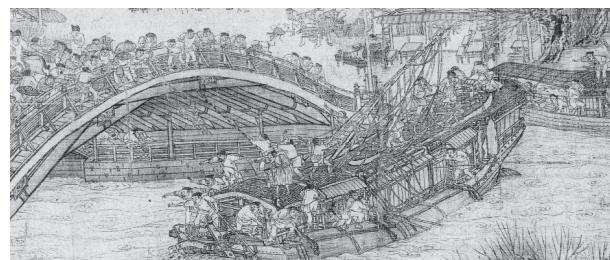
出版年 2008~2010年

宋画全集(全7卷)の刊行は、中国や東アジア美術の研究者や愛好家にとって一つの朗報である。本年度人文学研究所に入荷したのはそのうちの4卷18冊である。宋代(960~1279)は、中国美術史における一つの極めて重要な時代で、漢・唐以降の古代絵画の集大成をなすと同時に、のちの元・明・清時代の絵画の流れを決定づけるエポックとなる時代であった。宋の皇帝には芸術、文学や文化に造詣の深い人物が多く、北宋第8代皇帝宋徽宗(1082~1135)自身も優れた作品を多く残した画家、書家であった。宋徽宗の頃、国家による「翰林图画院」の設立と科挙試験における絵画科目的導入は、当時の人々の美術への関心を高め、絵画に生涯を捧げる若い芸術家の層を育て上げ、「院体画」「文人画」「風俗画」などさまざまな流派の絵画を生み出した。宋代の絵画の特徴には、宗教(仏、道、儒)人物画の背景から独立した山水画の確立や、秀逸精緻で色彩豊かな花鳥画の誕生、市民生活を写実的に描いた社会派絵画の出現などが上げられる。

画家安野光雅氏はエッセー集『会いたかった画家』の中で宋代の張択端(1085~1145)を取り上げたが、張択端の代表作「清明上河図」は、宋代の市民生活をいきいきと描いた長尺の絵巻で、『宋画全集』の第1卷第2冊に収録されている。安野氏はその作品について「見るまでは死ねない」と評している。

宋画全集は、世界各国の美術館のコレクションから1500点の作品を蒐集した。この資料は、中国宋代の美術だけでなく、社会、文化、風俗、景観、交通、建築、言語、文字などの分野の研究にとっても欠かせない貴重なものだと言うことができる。

張択端作『清明上河図』(12世紀頃)局部



(文責 彭国躍)

所員自著紹介

1. 書名：『日本／フィリピン歴史対話の試み：グローバル化時代のなかで』
2. 著者：永野善子
3. 出版社：御茶の水書房
4. 出版年月：2016年3月31日
5. ページ数：iv + 195頁 + x

本書は、日本とフィリピンを帝国アメリカのもとで対峙させることによって、日本の「知の植民地」状況を超える方法をポストコロニアルの視点から探った試みである。フィリピンにおける歴史研究や論争を紹介した上で、19世紀末のフィリピン革命の英雄ホセ・リサールのアメリカ植民地期における神格化過程と戦後日本の象徴天皇制との比較検証や、グローバル化時代の日本社会の変容と海外出稼ぎ・国際結婚などの議論を通して、二つの社会にアメリカ性が内在する歴史的根拠と経緯を明らかにしている。

(永野善子)

1. 書名：『テクスト分析入門 小説を分析的に読むための実践ガイド』
2. 著者：松本和也（編）
3. 出版社：ひつじ書房
4. 出版年月：2016年10月
5. ページ数：264頁

本書はタイトル・サブタイトルが示す通り、ストーリー読解やテーマ理解だけでは拾いきれない、小説に固有の仕掛けや技術を学ぶための入門書である。別のいいかたをすれば、ごく個人的に感じられた小説の面白さや感動などが、どのような表現によってもたらされたものなのかを、客観的に分析・説明するための手引きである。

もとより、こうしたアプローチは、いかなる意味でも新しいものではない。ロシア・フォルマリズムを経た構造主義において花開いた、ナラトロジー（物語論）と称される理論／体系がすでにあ

り、それを輸入した日本においてもこうした分析手法の概説書もあり、またそれを援用した論文も少なからず発表されてきた。それでも、テクスト分析のための分析概念の紹介・解説と、その実践的な応用をセットにした入門書は、これまでなかった。

内容としては、夏目漱石『夢十夜』「第一夜」、森鷗外「高瀬舟」、芥川龍之介「南京の基督」、川端康成「伊豆の踊子」、岡本かの子「老妓抄」、太宰治「桜桃」について、作家・作品（研究史）を紹介した上で、登場人物の心理などの情報がどのように制御されているか、出来事の生起した順序は小説内でどのように配置されているか、そもそも語り手はいつ・どこからその物語を語っているのか、などの観点から、具体的な分析例を多数提示することを目指した。小説その他のテクストに関心をもつ人々に、テクスト分析を学ぶ一助になれば幸いである。

(松本和也)

1. 書名：『「海邦小国」をめぐして——「史軸」批評による沖縄「現在史」』
2. 著者：後田多敦
3. 出版社：Mugen
4. 出版年月：2016年7月
5. ページ数：320頁

沖縄で起きている出来事や沖縄—ヤマトの重層的な歴史的関係を無視して論じられるさまざまな言説を、「史軸」批評という方法にとづいて論じた評論集。2000年から15年までに雑誌や新聞等に発表した論考35本が収載されている。沖縄の島々の歴史や文化、人々の暮らしなどに軸足を置きながら、東アジアに位置する島嶼群の「現在」を読み解き、海邦と呼ばれた島々の未来の政治社会「海邦小国」やその原理を「まーゆ（真世）」として描く。そして、辺野古新基地建設問題や「歴史認識の修正」の動きなど、現在の沖縄の課題を歴史の中に位置付けその「根底にあるも

の」を解き明かしている。

(後田多敦)

1. 書名：『会話分析の基礎』
2. 著者：高木智世・細田由利・森田笑
3. 出版社：ひつじ書房
4. 出版年月：2016年12月7日刊行
5. ページ数：361頁

会話分析は、日常会話の詳細な分析により相互行為の秩序を明らかにすることを目的として社会学から生まれた学問分野である。本書は、相互行為を分析する際の視点や会話分析が目指すものをわかりやすく解説し、豊富な事例と各章末の課題を通して会話分析の基礎を学べるようにした入門書である。

まず、第1章では、そもそもなぜ「日常会話」に着目するのかという点を糸口に会話分析の知的源流と成立を概説している。2章では会話分析の視点と研究プロセスについて述べている。ここでは、とりわけ談話分析的研究との違いを明らかにした上で会話分析の研究プロセスと会話データの取扱いに伴う倫理的問題点、および会話分析研究の信頼性、妥当性、客觀性について解説している。第3章から第5章にかけては日常会話の基本組織として、順番交替（第3章）、行為の連鎖と優先組織（第4章）、および修復（第5章）を紹介している。第6章では、日常会話においてしばしば生じる「物語（自分の体験や過去の出来事など）を語るふるまい」について検討している。第7章では、私たちが常に受け手に合わせて発話をデザインしていることについて特に人や場所の言及に焦点を当てて論じている。さらに、第8章では、相互行為の中で「文法」を捉えるとどのようなことが見えてくるかを明らかにしている。最後に、第9章では、制度的場面の相互行為およびその一例として教室相互行為に焦点を当てて紹介している。

なお、細田が1章、2章（高木と共同執筆）、5章、6章、7章、9章、高木が2章（細田と共同執筆）、3章、4章、森田が8章の執筆を担当した。

(細田由利)

1. 書名：『「植民地主義論」再考 グローバルヒストリーとしての「植民地主義批判」に向けて』
2. 著者：小倉英敬
3. 出版社：搖籃社
4. 出版年月：2017年1月10日
5. ページ数：278頁

1998年7月に国際刑事裁判所（ICC）の設立に向けて採択された『ローマ規定』の第7条に「人道に対する罪」が規定され、また2001年8月末～9月初めに南アフリカのダーバンで開催された国連主催の所謂「ダーバン会議」において植民地主義、奴隸貿易、奴隸制が告発されて以降、米国やカリブ海諸国において植民地主義や奴隸貿易・奴隸制に関する謝罪要求・賠償請求の動きが活発化し、「植民地責任」論が主張されている。

2013年8月にCARICOM（カリブ共同体）諸国が旧植民地5ヶ国に対して謝罪要求・賠償請求を求める決議案を採択した。また、米国では、2014年8月に白人警官による黒人青年射殺事件が発生したことを契機として全国的な黒人擁護運動である「BLACK LIVES MATTER」が結成され、2016年8月には奴隸制に関する賠償請求を行うことを決定している。

これらの動向はフランスなどのヨーロッパで多発している旧植民地諸国からの移民2・3世による「ホームグロウン」型テロが頻発する動きと同根を持つ同時代的な世界的な減少である。その背景には1415年のポルトガルによるアフリカ北岸のセウタ占領から始まったヨーロッパ植民地主義列強による世界支配の「負」の遺産がある。

1960～70年代には大多数の旧植民地主義諸国が独立を果たしたが、これら諸国は今もなおポストコロニアルな状況下にあり、さらに世界的にも「植民地主義」は、「グローバル化」時代においても外貌を変えて、国内植民地問題、グローバル・シティのヒエラルキー、外国人移民問題の形で継続している。本書は、このような問題意識から、「植民地主義」をより本質的に考察するために、その歴史的段階区分をはじめ、「植民地主義論」の総論的な再構築を試みた。

(小倉英敬)